

## 沈黙の有意味性

一橋大学大学院法学研究科 准教授 阿部 辰雄

自分の教養を深めたいけれどなかなか時間が取れない。そう思っていた私が出会ったのがNHKの「100分de名著」です。この番組は一つの著作について、その作品に造詣の深い専門家が25分×4回で分かりやすく解説してくれるものです。この番組自体素晴らしいのですが、そのテキストの出来がすこぶる良いのです。100分の内容がテキストベースにまとめられており、ちょっとした時間に読むのに最適です。

そして、今回紹介するのはシリーズ中で最も私が熟読している『〈NHK100分de名著〉吉本隆明「共同幻想論」2020年7月』（先崎彰容／著、NHK出版、576円）です。日本大学危機管理学部の先崎教授が難解といわれる『共同幻想論』を解説してくれています。

「はじめに」で先崎氏は『共同幻想論』について「ごく簡単に言っておけば、私たちにとって「国家」とは、「共同体」とは、「法」とはなんなのか—それらと人との関係を問い質し（中略）とりわけ国家がどのようなプロセスで

誕生したのかを、きわめて独自の手法で描き出そうとした」としています。この「きわめて独自の手法で」というところが大切で、日本人であり、佃島の船大工の息子である吉本隆明が、『古事記』

『遠野物語』を題材にするという手法により書かれたこの本は、西欧や中国やインドの大陸からの借り物の思想ではなく、私たちの生活や心の奥底にすっとなじむものであるように感じます。

本書の中で私が最も感銘を受けたのは、「沈黙の有意味性」という考え方です。「啓蒙家が大衆をマッス、つまり抽象的で大量の人々の群れと見なすのにたいし、吉本は大衆の微細な生活意識に注目」し、「生活者一人ひとりの生活音、生活臭に焦点をあて」ます。その結果導き出されるのが「沈黙の有意味性」であり、その考え方は以下のようなものとされています。「生活者は普段から、（中略）日々の生活と労働を黙々とこなし、一人ひとりなすべきことをやっています。自分の生活リズムを決して手放さない、この不器用さを「沈黙」と名付けよう。（中略）国家（中略）が日常の生活リズムを奪う時、彼らは個人的な生活感覚から、それをおかしいと考え始めます。知識人の誘導によって政治問題に駆り立てられ、走り出すのではなく、生活が乱されるから政治に注目するのだ」。住民の方々の「沈黙」の意味を理解し、その暮らしを守るという一見当たり前のようですが見落としがちな感覚を、改めて心にとめることができました。時にはこうした深い教養に、それも100分で手軽に触れてみるのもよいのではないのでしょうか。



『〈NHK100分de名著〉吉本隆明「共同幻想論」2020年7月』  
先崎彰容／著 NHK出版